

「ヒヤシンス」

廣瀬清一 事務局



暦の上では春になったとはいえ、まだ寒い日が続いている。

スーパーの入り口で、花芽の付いたヒヤシンスの球根の小鉢を見つけた。小学生の時、ヒヤシンスの水栽培をした記憶がよみがえり、懐かしい気持ちがして購入した。

ガラス製のポットの中を白い根がまっすぐに伸び、そのうちポットの中が根でぎゅうぎゅうになるのを見て驚いたが、不思議なことに香りの印象はあまり残っていない。そんなことで、花の咲くのが待ちきれず、涼しいところで育てるのが鉄則のようで多少不安があったが窓辺の暖かいところに置いた。

嬉しいことに、わずかにのぞいていた花芽はみるみる成長し、見事な花を咲かせてくれた。

一日中、透明で爽やかなグリーン・フローラルな心地よい香りが優しく部屋中に広がった。暖かさと冷たさが入り混じったこの時期の風のように香っている。

ヒヤシンスは、漢字で『風信子』とも表記する。松浦亜弥の曲のタイトルにもなった。

サビの部分では

「・・・ありがとう 私はいつか私らしい風になる

ありがとう あなたがくれたすべてにありがとう

ありがとう あなたがくれたすべてにありがとう」

と感謝の歌詞が繰り返され、卒業シーズンにピッタリだ。

我が家のヒヤシンスは健気に2本目の茎からも美しい花を咲かせてくれた。ありがとうの気持ちを込めて、一回り大きい鉢に移し替え屋外に出した。

ヒヤシンスの花から採られる天然香料はとても貴重な存在だった。

中村会長の書籍にエピソードが載っている。

要約すると「やや重い青臭さの中に、広がりのある強い甘さを感じる魅力的なヒヤシンスの天然香料の紹介があった。さっそく試作品に試してみると、品の良い、新鮮で持続するグリーンと、力強い華やかさが加わる。

ところが、その時在庫が世界中にたった二百五十グラムしかなく使うのを断念せざるを得なかった」とある。

ヒヤシンスの天然香料は、1950年代には200Kgの生産があったが、1960年代50Kg、1980年代に入ると数百グラムとなり、今では市場からなくなってしまった。

ヒヤシンスは地中海東部沿岸(ギリシア、トルコ、シリア)からイラン、トルクメニスタン付近が原産。

ヒヤシンスは16世紀にヨーロッパにもたらされた。オランダでチューリップと同じように改良され、たくさんの品種が作出され人気になった。



フシヤシントウ 『新渡花葉図譜』

渡辺又日菴 (伊藤小春 写)

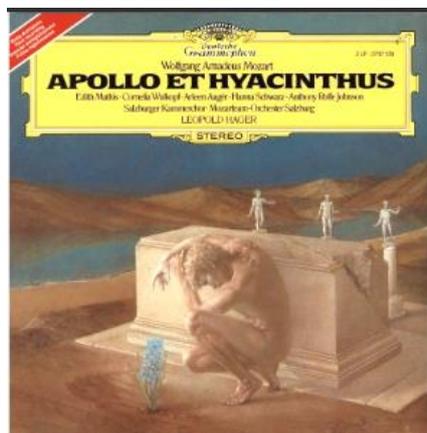
日本には、幕末に海外からさまざまな草花や樹木、農作物などが持ち込まれたときに、キンギョソウ、ヤグルマソウ、チューリップなどと一緒にフランスから渡来している。

そのころ渡来してきた150種ほどの植物を集めた『新渡花葉図譜』に、フシヤシントウという名で淡紫色、橙色の2品が載っている。

ヒヤシンスの学名 *Hyacinthus orientalis* にあるヒュアキントスとは、ギリシア神話にでてくる美少年の名前。ヒュアキントスは、太陽の神アポロンと西風の神ゼピュロスの両方の神から慕われる。

ところが、ヒュアキントスはゼピュロスではなくアポロンに心を寄せる。そんな折、ヒュアキントスとアポロンが仲良く円盤投げをしていた。それを見たゼピュロスは、これを妬んで意地悪く強風を送くる。するとアポロンの投げた円盤が強風でそれてヒュアキントスの額に当たり絶命してしまう。地面に広がったヒュアキントスの血にアポロンの悲しみの涙が重なり、そこにヒヤシンスの花が咲いたという。

モーツァルトは、この話をもとに脚色した歌劇『アポロとヒュアキントス *Apollo et Hyacinthus*』に、弱冠11歳で曲をつけている。



『アポロとヒュアキントス』

モーツァルト作曲

グラモフォンレコード

総状に付くヒヤシンスの花は、小花に分けてリースやレイにして古代ギリシアから使われてきた。

アルフォンス・ミュシャの作品は、日本でもファンが多い。サラ・ベルナールの演劇ポスター『ジスモンダ』をはじめ、『ジョブ』『黄道十二宮』『夢想』『四芸術』など優美な女性と草花の柔らかない曲線の文様を活かした魅力的な作品が多数ある。

この中に、鍛冶屋が見た夢からはじまるおとぎ話、バレエ・パントマイムの宣伝ポスター『ヒヤシンス姫』がある。ヒヤシンス姫は、大きな椅子に悠然と腰かけ、ヒヤシンスがあしらわれたリース、頭は赤いヒヤシンスの花で飾られ、手にはヒヤシンスの飾りのついた輪を持ち、ガウンや衣装にもヒヤシンスの装飾がある。

気高く、まっすぐ前を見つめる青い瞳には、祖国とスラブ女性に対するミュシャの気持ちが表れている。



『ヒヤシンス姫』

アルフォンス・ミュシャ

ヒヤシンス 薄紫に 咲きにけり

はじめて心 顛ひそめし日 北原白秋

(薄紫色にヒヤシンスが咲きました

初めて誰かを好きになって

心がふるえ始めたあの日)

いつもと違う春、

どんな風になるのでしょうか。

参考文献

- 1) 中村祥二『調香師の手帖 香りの世界をさぐる』朝日文庫 2008年
- 2) 磯野直秀『明治前園芸植物渡来年表』慶應義塾大学日吉紀要・自然科学、42号、2007年
- 3) L. ディーズ 吉富久夫(訳)『花精伝説』八坂書房 1988年
- 4) 渡辺又日菴(伊藤小春 写)『新渡花葉図譜』国立国会図書館デジタルコレクション
- 5) モーツァルト作曲 歌劇『アポロとヒュアキントス』グラモフォンレコード
- 6) アルフォンス・ミュシャ『ヒヤシンス姫』1911年 ミュシャ美術館
- 7) 八王子市夢美術館『アルフォンス・ミュシャ展』2023/4/7~6/4 <https://www.yumebi.com/exb.html>